
SS5__強がりと不安と、絆と

マジチョコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SS5―強がりと不安と、絆と

【Nコード】

N6898Z

【作者名】

マジチヨコ

【あらすじ】

ジャックを黙って送りだしたメリッサ。

彼女は不安を抱えながら、それを見せる事は無かった。

そして、もう一人、セシル。

「その勝手な決闘」の裏側で二人が思う事は…？

「大変だよ大変だよ、メリッサ！グレンが〜」

バタバタと大袈裟な音を立てて、ベルガモット邸に駆け込んできたのはメリッサの親友、セシリアリスタだった。

そして、メリッサの座るテーブルの上には既に珈琲とセシルの好きなお茶がそれぞれ用意されている。珈琲を口に運びながら、メリッサは一息吐いて、部屋に駆け込んだセシルに声をかける。

「ま、来ると思っていたけど……とりあえず座りなさい」

「でも、グレンが〜」

セシルはメリッサの目の前でわたわたと身振り手振りで「大変なのだ」と表現する。

「知ってるわ。グレンがジャックと決闘、でしょ？」

「そうなんだよ、大変だよグレンが……え？」

途中まではそれまでの勢いで一息に言葉を並べたセシルだったが、今度はきよとんとした顔になりメリッサを見つめてくる。

「まあ、ね」

だが、返事は妙に歯切れが悪い。普段から凜としたメリッサに珍しい事だとも言える。しかし、表情には割と余裕があるようにも感じられる。今頃思い出したように、椅子に座ったセシルはお茶を啜って、思った事を素直に聞いてみる事にした。

「何でかな〜？」

「何ででしょうねえ」

セシルはもう一度「えっ？」と言葉にはしなかったが、何よりその表情が今の彼女の心中を表わしていた。

ため息一つ、メリッサは少しその余裕の表情を崩して笑った。苦笑いにも取れるようにセシルには見えた。

「何だ、メリッサも知らないんじゃない？」

「う、うるさいわね」

今度はちよつと拗ねたようにメリッサは表情を崩す。セシルの前では何時もの事だった。

「不安じゃないの？」

一言。セシルはそう言った。その表情も実に心配そうである。

メリッサは今度は心の中で笑う。その優しい優しい笑顔を見せるのがちよつとだけ彼女のプライドを刺激したから心中である。

「本当に、セシルや……私に不安をかけてあの二人は何をやっているのかしら」

ジャックの前では出せない、ちよつとした不安を覗かせてぼそつと呟いた。だが、それは一瞬だけ。親友の前だからこそ彼女は格好付けたいとも思った。そして、何より彼女を元気づけてあげたい。そう思った。

「ま、でもね、セシル」

「うん？」

メリッサはセシルの頭の上にポンと手を置いてウインクして見せる。メリッサ自身がどう思おうときつとそれは強がりなどでは無く、彼女の芯の強さ。ベルガモットの女に脈々と受け継がれる物だった。

「こつという時は、女がしっかりと強さを見せる時よ」

セシルの顔にぱつと笑顔が咲く。その花のような笑顔が、メリッサは大好きだった。

「うん！」

「さてと……お父様なら何か知ってそうね」

自分の愛した男を信じる。だが、それだけで大人しく待っているだけのメリッサでも無かった。最も、それは本人にはやはり無自覚なだけで、愛されるジャックが一番身をもって知っていたのだが、それはまた別のお話。

「行くわよ、セシル」

メリッサの凛々しくも真っ直ぐな所。セシルが大好きな表情をメリッサは湛えて、言い放った。

「西の闘技場だな」

ヴィクトールの書齋に向かったメリッサとセシルは彼に、二人の事を聞こうとすると特に隠す様子もなく、何事でもないようにグレンとジャックの居場所を教えてくれた。

「お父様、最初から知っていたいらないのですね」

メリッサは腕を組み、ギロリと父親を睨んだ。

「そりゃあ知っておるわ。魔法兵団の隊長を務めあげた程の者達が戦うのじゃからの。思い出すの、ワシも若い頃は、それは強い者と戦うのが」

「何で許可したのですか、止めなかったのですか!？」

自分では無理でも父親であり、魔法兵団総隊長のヴィクトールなら止める事も出来た筈だった。ずいっと身を乗り出し、噛みつくように言うメリッサにヴィクトールは一步後ずさる。

「ちょっと待て、落ち着けメリッサ」

娘の剣幕に、流石の魔法兵団総隊長もたじたじになり、必死にないだめようとす。

「で、でも……二人に何かあったら!」

自分で言っていて、やはり止めれば良かったのかと少しの後悔に駆られそうになるメリッサだったが、その微妙な表情の機微をヴィクトールはしっかりと見抜いていた。

「まだまだ青いの、お前も婿殿も」

あえて、からかうようにジャックの事をそう呼んだのもヴィクトールなりの気遣いだった。

「心配するな、メリッサ男には拳で語った方が早い事もあるんじゃない。そう思ったからお前も止めなかったのだろう?」

ヴィクトールはちらりと時計に目をやる。

「二人とも、おそらく一生に一度の事じゃろう。存分にやれば良い」

ヴィクトールはそう言うのとセシルの方を向いた。

「そろそろ終わる頃じゃ。お前さん達が迎えに行つてやるのが良からう。何せ、どちらもすつきりした顔で倒れておるからな」

机の上に置かれていた杖を無造作に一振りするとヴィクトールの右手の下にあつた水晶が光を放ち、とある場所の映像を映し出す。

「それにな我が弟子共の事だ、ちゃんと見張つておるわ」

どうだと胸を張るヴィクトールを、涙目で睨むメリッサに素直に感嘆するセシル。

「二人とも大きな怪我はないが、しばらく歩けまい」

ヴィクトールの言葉にセシルはぐいっとメリッサの腕を引っ張る。

「行こう！メリッサ！」

「やれやれ……」

二人の去つた後のシーンとした部屋に一人佇むヴィクトール。

「全く、強気な癖に心配性な所は良くお前さんに似ているよ」

一人笑い、一人咳く。

澄み渡つた夜空を窓から見上げて、ヴィクトールは面白そうにもう一度笑つた。

(後書き)

マジカルハロウィン妄想と言う名のSS第五弾！

前回、第四弾の裏側、待たされる彼女達の心中は…と言った感じで短いですが、書いてみました。

今回はちょっと力不足を痛感…。

もうちょっと、しっかりとセシル、メリッサの心情を表現したかったのですが上手く彼女達を動かしてあげられなかった感がありますね。特にメリッサさんが強気なのか、それでいて弱気なのか上手くメリハリを付けられなかった気がしてます。

でも、相変わらずカツコイイ時(セシルとやり取りしてる所)のメリッサさんは書いていてノリノリになっちゃってたんですけどw
今回もお粗末の文章に付き合っていたいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6898z/>

SS5_強がりと不安と、絆と

2011年12月23日02時49分発行